

今週の為替相場見通し(2022年4月18日)

総括表		注	先週の値動き		今週の予想レンジ
			レンジ	終値	
米ドル	(円)		123.97 ~ 126.70	126.56	125.00 ~ 128.00
ユーロ	(ドル)		1.0758 ~ 1.0955	1.0810	1.0700 ~ 1.0900
(1ユーロ=)	(円)		135.40 ~ 137.13	136.60	135.00 ~ 138.00
英ポンド	(ドル)		1.2973 ~ 1.3147	1.3058	1.3000 ~ 1.3200
(1英ポンド=)	(円)	*	161.67 ~ 165.46	165.15	164.00 ~ 166.50
豪ドル	(ドル)		0.7390 ~ 0.7493	0.7390	0.7300 ~ 0.7500
(1豪ドル=)	(円)	*	92.28 ~ 93.87	93.52	92.00 ~ 94.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

市場営業部 為替営業第一チーム 西 拓也

(1) 今週の予想レンジ: 125.00 ~ 128.00 円

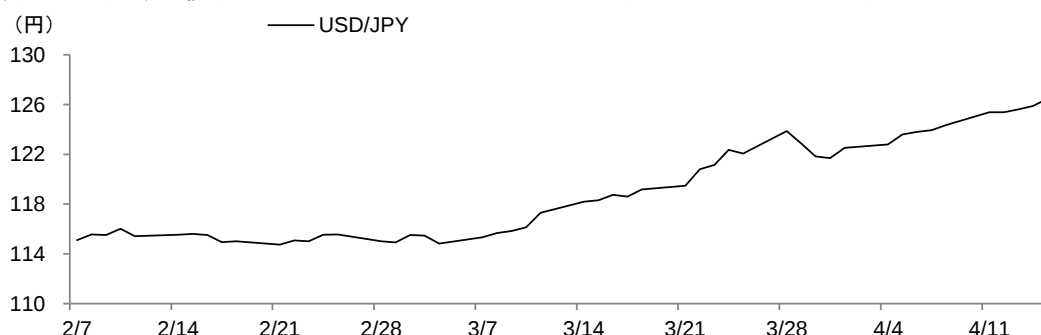
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

今週のドル/円相場は週半ばに126円を突破、約20年ぶりの高値を記録した。週初11日、124.40円付近でオープンしたドル/円は前週末からの米長期金利上昇によるドル買いが継続。日銀の金融緩和方針の継続と円安容認姿勢が意識され125円台後半まで急上昇した。12日、ドル/円は鈴木財務相の円安牽制発言を受け125円台前半まで下落も、米長期金利が堅調推移する中、欧州時間に前日の高値付近まで上昇。米国時間では米3月CPIが約40年ぶりの高水準を記録するもコア指数は予想を下回り、発表直後に124円台後半まで急落した。売り一巡後は125円台前半まで回復した。13日、ドル/円は125円台半ば付近で小動きも、黒田日銀総裁による金融緩和政策の継続姿勢を改めて強調した発言を背景に急伸し、約20年ぶりの高値となる126.32円をつけた。その後は米長期金利低下や利益確定の売りが優勢となって、再び125円台半ばまで下落。14日、ドル/円は米金利低下やイースター休暇を控えポジション調整の動きが散見され、125円台で上値重く推移も、その後は米4月ミシガン大学消費者マインドをはじめ複数の米経済指標の良好な結果を受けて再度126円台に乗せた。15日、5・10日における実需のドル買いもあって仲値にかけて126.40円付近まで上昇。その後はイースター休暇による薄商いの中、米長期金利の高止まりを支えに一時126.70円を付け、20年ぶりの高値を更新した。

今週は、126円ちょうどを軸に上値を探る展開となりそうだ。円相場の潮目を変える材料は乏しい。先週は、2.8%台への米長期金利上昇に加え、「現在の強力な金融政策を粘り強く続ける」といった黒田日銀総裁の金融緩和政策を断行するとの発言がトリガーとなり、2015年6月高値(125.86円)を難無く上抜け126円台を付けた。130円ちょうどまで目立ったチャートポイントは無く、上昇しやすいだろう。5月・6月FOMCでの+50bp利上げは既定路線と織り込まれており、米長期金利の高止まりを背景に日米金利差を意識したドル/円上昇圧力は継続するだろう。今週相次ぐFRB高官の発言やベージュブックを踏まえ、ブラックアウト期間前に金融政策の正常化加速を後押しできるか確認したい。一方、24日(日)にはフランス大統領選挙の決選投票が行われるため、マクロン大統領優位な戦況を固められるかに注目。極右ルペン氏が優勢となれば、ユーロ圏の政治リスクに繋がりがユーロ売りドル買いが優勢になるものと想定され、ドル/円の値下がり上げにも警戒が必要だ。今週は、20日(水)日3月貿易収支、米ベージュブック、22日(金)米4月製造業PMI速報値/サービス業速報値等の経済指標の発表を控えている。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/11~4/15)の値動き: 安値 123.97 円 高値 126.70 円 終値 126.56 円



2. ユーロ

市場営業部 為替営業第二チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.0700 ~ 1.0900 135.00 ~ 138.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドル相場は週後半に急落、約2年ぶりの安値を付けた。週初11日、ユーロ/ドルは週末の仏大統領選でマクロン大統領が首位を維持したことが好感されアジア時間早朝に週高値の1.0955まで上昇した。欧州時間は米長期金利上昇に伴うドル買いに押され1.08台後半でオープンし、その後も軟調地合いとなった。12日、ユーロ/ドルはユーロ圏4月ZEW景気期待指数の冴えない結果や欧州株の軟調推移に1.08台前半まで値を下げた。その後は米3月CPIの結果に瞬間的にドル売りが加速し1.09台を回復も、追加材料に欠け再び1.08台前半まで下落した。13日、前日の水準を方向感なく推移したが、その後は米金利低下を背景にドル売りが強まり、1.08台後半まで反発した。14日、ユーロ/ドルは一時1.09台を回復も、ECB政策理事会のハト派的な結果にユーロ売りが強まり、約2年ぶりの安値1.0758をつけ、その後は休暇入り前のポジション調整に1.08台前半まで上昇した。週末15日から欧米はイースター休暇、ユーロ/ドルは1.08付近で終始小動きのまま同水準にてクローズした。ユーロ/円相場は、ユーロ安も円安も進行したため、135~137円を中心としたレンジにて推移した。

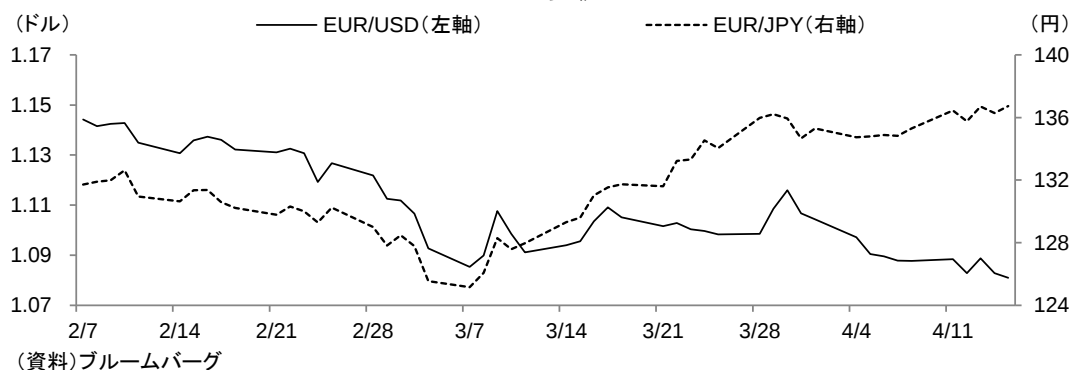
今週のユーロ/ドル相場は引き続き軟調な推移を予想。ユーロ/円相場は、円についても軟調推移を予想しており、現行水準でのレンジ取引が継続するだろう。先週14日開催のECB政策理事会では、量的緩和策縮小の継続が決定され、今年7~9月期に資産買い入れを終了する見通しが示されたが、具体的な利上げ時期への言及等が見られず、早期利上げ期待が剥落している。一方で、FRBは5月の会合にて利上げペースの加速(+0.5%の引き上げ)が期待されており、両者の引き締めペースの差が引き続きユーロ売り・ドル買いを後押しすると考えている。また、別のユーロ安要因として景気減速懸念がある。今週22日(金)に発表予定のユーロ圏4月PMI(速報)は、製造業PMIもサービス業PMIも先月に引き続き低下する予想となっている。先月もいずれの指標結果も低下しており、資源価格の高騰による生産価格上昇による悪影響や、ウクライナ侵攻による供給網の混乱や需要の減退などが指摘されている。いずれの影響も改善しているようには見えず、ユーロの軟調推移は継続するだろう。

(3) 先週までの相場の推移

先週(4/11~4/15)の値動き:

(対ドル) 安値 1.0758 高値 1.0955 終値 1.0810

(対円) 安値 135.40 高値 137.13 終値 136.60



3. 英ポンド

欧州資金部 本多 秀俊

(1) 今週の予想レンジ: 1.3000 ~ 1.3200 164.00 ~ 166.50 円

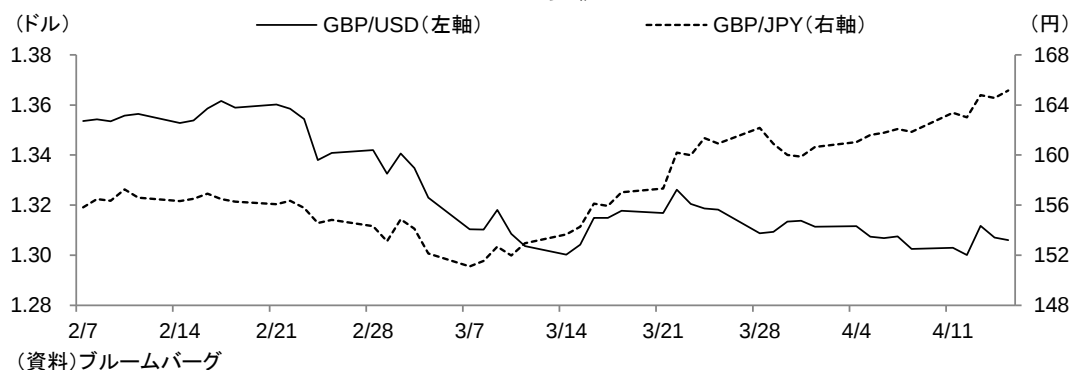
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は全面堅調。対ドルでは、乱高下を挟んで、結局、小幅水準切り上げにとどまったが、対円、対ユーロでは、週を通してほぼ一方的な堅調推移を続け、明確に水準を切り上げた。特に対円では前週末(8日)の引け値水準(162円前後)から15日の高値(165.43円)までの上げ幅が2.1%超にも上った。並行してドル/円がほぼ一方的な堅調推移を続けた経緯から、ポンドの対円での上昇は、円全面安の側面が大きかったものと考えられた。円安の要因は、引き続き、英中銀を含む主要国中銀が軒並み金融引き締め(利上げ)に向けた姿勢を強めるのと対照的に、日銀が一向に利上げの気配を示さないこと(金利差拡大観測)と、燃料価格などの上昇を反映した、日本の経常収支悪化(赤字定着)懸念とがあった。11日には、日銀黒田総裁が「必要なら躊躇なく追加緩和する」などとまで述べ、この間の円安進行を加速させた。ポンドが対ドルで見せた13日の急上昇は、同日発表された英3月CPIの上振れ(予想前年比+6.7%のところ同+7.0%)が貢献した可能性も考えられたが、値動き(CPI発表の約7時間後に急騰)から判断して、英CPIが直接の要因とは考え難かった。同日発表された米PPIの上振れにもかかわらず、前日から米長期金利低下が続いたことが複合的に影響し、ポンド/ドルの急騰を招いたものと考えられた。翌14日のポンド/ドルの反落は、ユーロ全面急落への連れ安と考えられた。同日の欧州中銀理事会後の記者会見でラガルド総裁が、資産購入策(APP)終了後、金利引き上げまでには数か月の時間が空く可能性があるとし唆したことが、「早期利上げの可能性が低下した」との失望を買ったものと考えられた。15日は復活祭休日で、欧米主要市場の多くが休場となったことから、ポンドを含む通貨市場全般は方向感を欠いた膠着を見せた。

今週の英ポンド相場は、(米市場は開くものの)週明け18日は英を含む欧州市場の多くが引き続き休場となることから、動意を欠いた穏やかな滑り出しを予想。週を通しての方向感にはポンド堅調推移継続を予想する。ポンド堅調を中心に見込むのはテクニカルな判断が大きい。ポンド/円の急騰、続騰には円安の比重が大きいものの、直近4週間のうち、先週を含む3週で直近高値を更新した勢いは無視できない。15日につけた165.43円は、2016年2月来の高値で、完全に英国民投票=EU離脱選択(2016年6月)来のポンド売り相場を抜け出したと言えるだろう。対ユーロでの上昇も同様。英国民投票後の急落以降、戻り高値を5回打った0.8310~0.8280水準を今年3月に上抜けた際には、「相場がひとつ終わった」と思ったものだ。その後、一旦は0.85ちょうどを割り込む水準までポンド安に振れたものの、先週、再び0.8280を上抜けたのは、やはり、英国民投票結果を材料とした相場が終焉し、現在までに新しい相場に移行したことを実感させた。ポンド相場が新しい局面に移行したのだとしたら、その要因は、コロナ禍やウクライナ戦争などの予期せぬ出来事がEU離脱の影響を薄れさせ、英国民投票後に予想された英経済への悪影響が未だ実感されないこと、加えて、英中銀が米連銀などと並んで「利上げ側」の中銀と見做されていることの影響が大きいだろう。英政治では、ジョンソン首相とスナク財務相が、(コロナ)ロックダウン中に(首相の)誕生会をしたなどの法律違反で、現職閣僚として英史上初の罰金支払いを命じられたり(12日)、パテル自治相(英政府)が、英に入国した難民を、ルワンダに移送して難民申請手続きをするため、ルワンダ政府に1,200億ポンドを供与する条約を結んだり(14日)と、先週も前代未聞の出来事が相次いだものの、ポンドを含む英金融市場が特段材料視した様子は読み取れなかった。現保守党政権の相次ぐ醜聞に、英国民も、金融市場も、すっかり慣れてしまったように思われる。当面、滅多なことで英政治がポンド市場で材料視されることはないのではなかろうか。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/11~4/15)の値動き: (対ドル) 安値 1.2973 高値 1.3147 終値 1.3058
(対円) 安値 161.67 高値 165.46 終値 165.15



4. 豪ドル

アジア・オセアニア資金部 シドニー室 川口 志保

(1) 今週の予想レンジ: 0.7300 ~ 0.7500 92.00 ~ 94.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは0.74前半を中心に軟調な展開が続いたものの、フィボナッチリトレースメント(年初来安値0.6968、高値0.7661)の38.2%戻し0.7395近辺で下げ留まった。前週は買われ過ぎを示すストキャスティクスRSI70をつけるまで継続的に買われていたが、月曜は4営業日連続で続落。米10年債利回りが3年ぶりの水準まで上昇した事も背景にドル買いが継続し豪ドルは緩やかに調整した。火曜に発表された米3月CPI総合は前年同月比で8.5%(CPIコアは6.5%)上昇し、40年来の大きな伸びを記録。数字発表後は米短期債を中心に利回りが急低下したことを受け、ドル売りを背景に豪ドルは0.7493まで上昇するもその後米株が軟調に推移すると豪ドルは0.74半ばまで戻した。水曜は前日発表の米3月CPI発表後の米金利の低下を受け、豪3年債利回りが▲9bp低下の2.47%にて始まり、発表された豪4月消費者信頼感指数が5か月連続の低下を示すと豪ドルは軟調に推移。海外時間に月初来安値0.7392の安値を付けるもフィボナッチ38.2%地点へ達すると0.74台半ばへ戻した。この他、黒田日銀総裁の「強力な金融緩和を継続」との発言に、ドル/円が126円を上抜けする場面では、豪ドル/円は一時93.87円の高値を付けた。木曜は豪3月雇用統計が発表され、不完全雇用は6.6%から6.3%へと改善したが、雇用者数変化は伸びが鈍化、失業率は予想3.9%に対し、前回復と同じ4.0%に留まった。雇用回復の思わぬ失速で豪ドルはこれを受けて0.74台後半から同前半へ値を落とし、揉み合いとなった後、海外時間で再び0.74ちょうどを割った。金曜、豪州はイースターホリデーで休場の中、0.7420から緩やかに下落し、再度月初来安値0.7392をつけた。

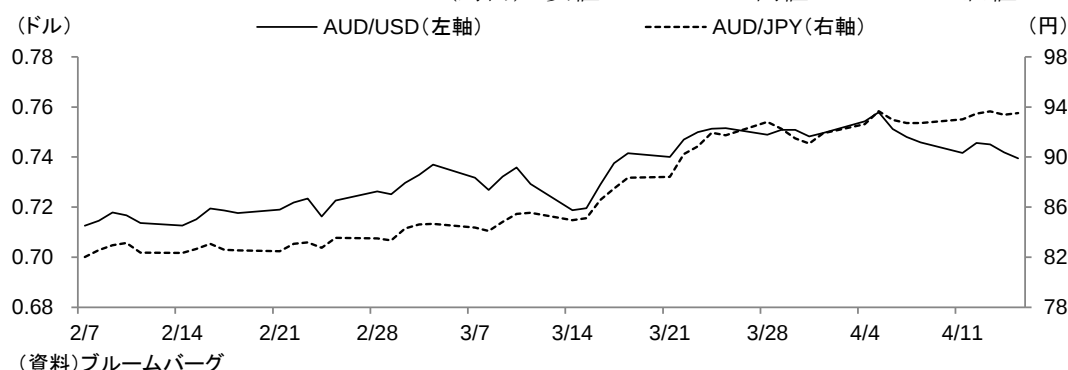
今週はFRBの金融引き締めによる金利先高観を背景に米債利回りが高止まりしドル買い継続で豪ドルは軟調に推移するとみる。先週フィボナッチ38.2%で留まっていた豪ドルが下を割るのか注目したい。これが割れるとこの下のサポートは0.7361(3月18日の安値)となる。今週の主要経済指標は18日、中1~3月期GDP、中国月鉱工業生産、19日豪RBA議事要旨などが予定されている。豪議事要旨に関しては利上げ時期に向けた手がかりを探る事となるが先週発表の豪3月雇用統計は回復失速で豪中銀に若干の余裕を持たせる結果となってしまっている。また、米国との利上げ時期や幅を比較すると、豪中銀が6月会合で0.25%まで+0.15%利上げすると市場の大方が予想しているのに対し、米国FRBに対する市場期待は5月会合で保有資産の縮小と+50bp利上げを視野に入れている。実際に対比させると結局豪中銀の利上げは僅かなベビーステップであるとリマインドさせられる可能性が高く、積極的な豪ドル買いは考えにくい。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(4/11~4/15)の値動き:

(対ドル) 安値 0.7390 高値 0.7493 終値 0.7390

(対円) 安値 92.28 高値 93.87 終値 93.52



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。